

自然な死 地域でつくる

滋賀県東近江市の永源寺地域。永源寺診療所長の花戸貴司さん(47)に同行し、山間部で林業を生業としてきた上田満さん(91)を訪ねた。満さんは、認知症の妻(83)と2人暮らし。隣家に住む長男の妻、きよみさん(56)を頼りにしていた。

昨年11月、もの忘れや心不全が悪化した。車のハンドルの切り返しがうまくいかない姿を気にかけて近所の人々が、満さんのケアマネジャーに知らせた。みんなが相談し、車の運転をやめることにした。雪深い土地では大きな決断だ。診療所への通院に代わり、花戸さんの訪問診療が始まった。

「(口から)ご飯が食べられなくなったらどうしますか?」。花戸さんの問いに対する折々の答えが、満さんの電子カルテに残っている。その都度、深く考え、言葉を重ねてきた。

「人生の最後を考えなあかな」(88歳の時)。「できれば、妻と一緒に最後まで家で」(89歳の時)。「病院より家で過ごしたい」(90歳の時)……。

花戸さんは、診療所に寄るきよみさんに、それを伝えた。自分の生を生きる以上、いつかは遠慮を排し、家族の前で本音を語るのが

よい。花戸さんとの対話は、その練習だ。きよみさんは、「私たちが心構えをつくる練習」と受け止めた。

人生の最終章では、医療からケアへ重心を転換させることが必要だと、花戸さんは考えている。死をタブー視し、最後まで医療にすがっていると、在宅療養に移る力を失ってしまう。

花戸さんの赴任後20年かけて、人口5400人、高齢化率34%の永源寺地域は、本人が自然な死を選んでいく文化を育んできた。昨年、同地域で亡くなった人は60人前後。このうち36人は、花戸さんが往診し、看取った人で、ほぼ全員が最後は過度な医療を受けず、家で息を引き取っている。

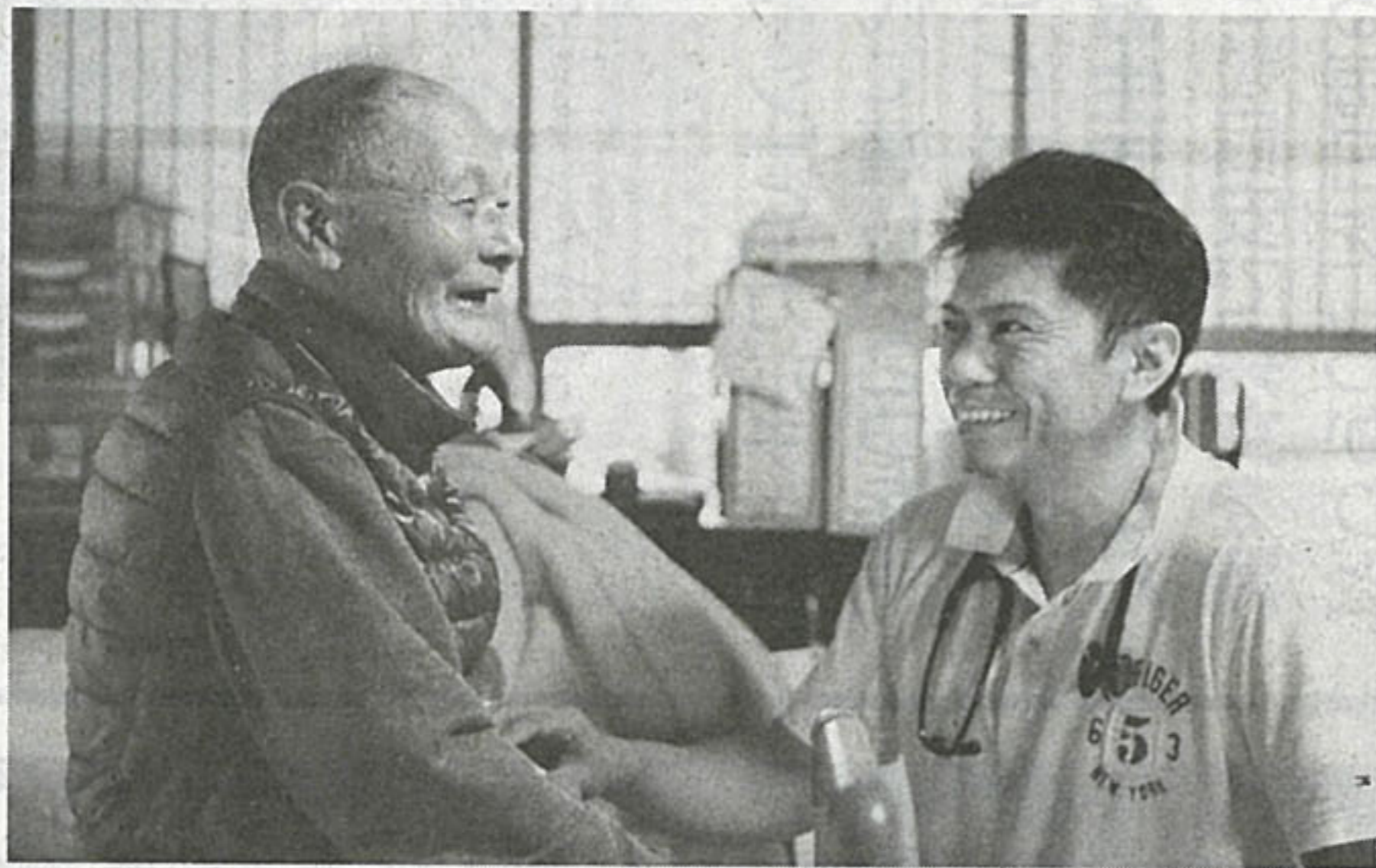
医療介護費の総額は他地域より少し高いが、住民の満足度はそれを上回る。満さんは朗らかだ。周囲

本心を言葉にできななら、後は家族の意向よりも本人の意思を優先できるよう、ケアチームと家族、近所などつながりうる人たちが緊密に連携する。その形が見えるから、一時入院しても、病院は患者を家に帰す。

が、自分の老いや病、死を素直に見つめ、気持ちに向けてくれる安心感が、この表情を生むのだろう。自然な死は地域でつくっていかると実感できる。それが、永源寺地域の「豊かさ」なのだ、記者は感じた。

日本は多死時代を迎えた。医療と死を巡る新たな価値観が必要だ。病院で死ぬことは不自然なのだ、

まずは意識を変えるべきではないか。過疎地である永源寺地域は、そんな示唆を与えてくれる。



診療にきた医師の花戸さん(右)と話す上田満さん。悪化していた体調も回復した(滋賀県東近江市) 前田尚紀撮影